

# 聖マリア国際協力ニュース

第 92 号

平成 20 年 4 月 1 日 発行

## 韓国カトリック医療協会・技師グループ研修を終えて

国際協力部 矢山進一

平成 20 年 2 月 22 日より実施していた韓国カトリック医療協会・技師グループ研修が 2 月 29 日をもって無事修了しました。今回の研修は日程が病院機能評価の受審と重複してしまい、研修生を受入れしていただいた各現場の皆様にはたいへんご苦勞おかけしたと思います。が、快くご協力いただき本当にありがとうございました。

聞くところによると、韓国の病院でも病院機能評価と同じような審査が 3 年毎に実施されているそうなので、研修生たちも、受審側である病院にとって、それがどれだけ大変なことか経験的に知っています。そんな状況の中で充実した研修を実施してくれた聖マリア病院に対して、研修生たちの方からも感謝の言葉が寄せられています。

今回の 10 名の研修生は日本語が上手な人が多かったうえ、性格的にも親しみやすい人ばかりでしたので、研修現場でのコミュニケーションは非常に良好であったようです。それを証明するかのよう、送別会には大勢の現場スタッフが詰めかけ、たいへん盛況ぶりの中、皆研修生との別れを惜しんでいました。おかげで多目に用意したつもの料理はたちまち無くなって



送別会での乾杯の様  
この後も続々と参加者が詰めかけました

しまい、十分な食事が取れなかった参加者の方には申し訳ありませんでした。

送別会に先立って行った評価会では、研修生の本研修に対する率直な意見・感想を聞くことができました。そこで最も多かった感想は、「聖マリア病院が患者

中心の医療という運営指針を本当に実践している点に感心した」というものでした。例えば今回初めて研修生を受け入れた行った栄養科に関しては、研修生より「季節やイベントに合わせて工夫したメニューが提供されている」とことについて、「韓国では考えられない」と驚きの声があがっていました。韓国の医療界でも近年、「患者満足向上の必要性」が重要なトピックとして頻繁に取り上げられているようで、それだけに当院において「患者とその家族に焦点を当てた医療」がどのように実践されているのかについては、研修生の関心の的になっているようです。今後はこうした声を活かし、関係各方面と協力しつつ、より充実した研修を目指してしていきたいと思ひます。



各研修生には修了証を贈呈

## 初めての途上国訪問を経験して

国際協力部 龍道代

平成 20 年 2 月 11 日から 2 月 17 日まで、厚生労働省国際医療協力研究委託を受けて研究活動をされている中野博行先生からお声掛けいただき、ラオスの現地調査に同行させていただきました。今回の私の目的は、途上国の保健医療の実状を知ること、国際協力部や NPO 法人 ISAPH が行う活動の円滑なサポート業務が出来るよう情報を得ることです。

ラオスでは、NPO 法人 ISAPH の活動地域であるカムアン県の県保健局、県病院、セバンファン郡保健局、シーブンファン地区やカシ地区の村々、ヘルスセンター、首都ビエンチャンにあるマホソット病院を訪問しましたが、これはこれまで実施されてきた研修医の先生のフィールド研修や、職員のスタディ・ツアーと行程をほぼ同じくしています。今年の国際保健コース研修医の稲熊先生、中山先生、倉先生と指導医の浦部先生と行動を共にさせていただいたこと、中野先生の指導のお陰で、目的は達することが出来ました。今



日本からのお土産に喜び子供たち

後は国際保健活動、人材育成活動のサポートを円滑に行えるように得た情報を活かしたいと思ひます。

今回のラオス訪問で嬉しかった事が 3 つありました。1 つは、ISAPH ラオスが現地にしっかりと根付き、ラオスの人々の信頼を得ているのが窺い知れたこと。もう 1 つは、国際協力部で行っているラオスのスタディ・ツアーやフィールド研修が本当に充実した研修であることが分かったこと。3 つ目は、聖マリア病院に以前研修に来ていたことがあるマホソット病院のチャンマニーさんやハンサナさんと再会できたことです。

ISAPH ラオスの皆さんと中野先生、浦部先生方からひとつひとつの見所とその意味を教えてくださいながらラオスを廻ることが出来た事で、初めての途上国訪問で、普通では得られない勉強をさせていただきました。また何事にも積極的な研修医の先生達と一緒できたことで大変刺激を受けました。関係下さいました皆さんに心から感謝致します。

## 「南東欧地域・病院運営」フォローアップ協力報告

連携推進チーム 浅田光博

当院においては平成 18 年度より南東欧地域（旧ユーゴスラビア）の病院運営コースの受入を行っている。今回そのフォローアップ協力として、南東欧の中心であるセルビア共和国を訪れた。

目的は以下の二点である。  
帰国研修員をセルビア共和国のクラグエバツクリニカルセンターに召集し、現地の病院にて病院運営に係る問題点や改善点を確認する。帰国研修員に対して、病院運営管理に対する具体的なイメージを持たせる。特にバリエボヘルスセンターおよびクラグエバツクリニカルセンターの現状を視察・理解し、次年度以降の研修内容に反映させる。よりニーズに沿った形で研修カリキュラムの再検討や提言を行う。

また期間は 3 月 3 日～7 日という短期スケジュールであった。

現地ではセルビア国内の 2 病院を訪問し視察や講義を行った。当院で研修を受けた数名と再会することができ、当院での研修内容の現場での実践を幾つか垣間見ることができた。

旧社会主義体制の崩壊により、体制移行期の今、現実として現地職員の意識改革が大きなテーマとなっている。まるで日本の悪しき日の旧国立病院を見るかのごとく、反体制職員が蔓延る中で、新体制へ向けて懸命に努力する元研修員の姿は頼もしい限りである。

新体制への移行は容易ではない。保険医療制度や支払い制度の違い、医療機器メンテナンスの考え方の相違、病院組織と役割業務の不明確さ・・・どれもこれも日本の事情とは異なる。何よりも仕事の目的と目標管理がなされていないようである。実際、同行した井福氏と現地職員とは機器管理について激論を交わし、猛烈な火花を散らした結果、少々身の危険を感じる程の不穏な雰囲気味わうことになった。

その中で、当院での研修で教授した中の「基本理念・運営方針の職員への啓発（掲示）」と「ご意見箱の設置」が実行されているのを見て、思わず嬉しくなった。また、運営管理を行う部門の設置もなされ、少しずつではあるが確実に新体制への移行が進んでいるのを実感できた。

医療に従事する意識は、反体制の職員にとって「単なる労働」であり、生活の糧のみである。日本のような組織力もなければ「仁術」的な要素もな



「基本理念・運営方針」  
を見つけて喜び井福氏

い。もっとも、誰が悪いとか、誰のせいだとか・・・そういう次元の話ではない。民族の違いは考え方のものであるようだ。

元研修員たちは言う。「いつまでも国際援助に頼っては行かない。自力で運営するだけの意識と、国の制度を変えて行

くだけの力や実績を身に付ける必要がある。これまでのようなハ・ド（機器・建物）の援助には限りがある。これからはソフト面の多くを日本から学びたい。」

医療技術そのものに差異はないが、それを生かす仕組みや制度が伴わない。未成熟な組織運営を動かすには強力なリーダーシップが必要であろう。現地病院の病院長は、まさにその役割を果たそうと必死になっている。その意味では当院での研修が、現実にその一助になっているのだということ認識させられた一週間であった。

JICA では、今回のフォローアップ協力を平成 20 年度も実施すべく予算措置を行っている。当院職員が、次回現地を訪れる時には、もっと進んだ良くなった状況を確認できるのではないかなと思う。

P.S.  
取り巻く風景はヨ・ロッパ調の石造りの建物が並び、北にはドナウ河が流れる風光明媚なところ・・・だそうです。（ほとんど見学してませんが・・・）肉料理がお好きな方は是非お奨めします。（というか肉しかありません）



研修員との集合写真

## 今月の動き

## 聖マリアブルーの皆様へ

- 【受入】
- ・3月17日（月）～3月28日（金）  
韓国忠南大学校病院医師2名が新生児センターにて研修
- ・4月24日（木）～4月25日（金）  
韓国江南聖母病院教授が聖母病棟にて見学研修
- 【その他】
- ・4月23日（水）～4月25日（金）  
韓国釜山にて第21回韓日技術協力協定運営委員会が開催

職員の皆様の中で、国際協力活動・国際交流活動について興味がある、もっと知りたい、できれば参加してみたい、とお考えの方はぜひ国際協力部（内線2385）までお気軽にご連絡ください。お待ちしております。

